

# 外国接近学教材の開発と実践

## オンライン教材による学生参加型教育をめざして

東京国際大学

桑原 政則

〒350-1198 川越市的場 A - 408

電話：0492-34-2254

E-Mail：kuwabara@tiu.ac.jp

### 1. はじめに

[授業科目名] 東南アジア社会文化論

[学部・学科名・単位数]

人間社会学部・国際関係学部 通年 4 単位

[授業形態]

学部間総合科目 2、3、4 年次生 140 名

[使用情報機器] パソコン、スーパープロジェクター、ビデオビューア、VCR、スライドテレビコンバーター、ソフトボード（電子白板）

[利用環境] 講堂でのスクリーン講義

[システムの規模] Windows95

[情報機器の利用頻度] 毎回全授業時間

### 2. 本論

〈現代認識〉の方法としての「地域研究」は、国家の単位で分断されがちな文化を、多様性と重層構造のままとらえようとする 21 世紀の哲学である。地域研究の一環としての「外国接近学」も、現地における踏査・研究を柱とするものであり、訓古の学でなく現代的問題意識の上に立つものである。この点で、マルチメディアでのバーチャル・リアリティを体験後に、現地研修・研究をおこなえば、その成果は倍増する。

今回は、筆者のホームページの中から「タイのページ」をとりあげ、発表をおこなう。

#### 2-1 外国接近学教材開発の目的

a) 板書授業ではなく、マルチメディア教材によるスクリーン授業を展開し、一斉授業の能

率化をはかり理解度を高める。

b) 教材は、学生にフロッピーの形でも配布し、場所、空間、距離を選ばない反復型学習を可能にする。

c) ホームページの「掲示板」を活用し、双方向性をはかる。これにより、学生の参加意識を高める。また、学生の意見を教材の改善に反映させる。

d) インターネットのさまざまな URL を紹介することにより、インターネットを学びの不可欠の道具として使えるようにする。

e) 現地研究の成果をホームページに掲載する。これにより学生は、講義の当初より参加意識、問題意識、目的意識をもつことができる。

#### 2-2 講義の構成

a) 毎回オンライン教材によるスクリーン授業をおこなっている。リアルタイムの時事ニュース、ビデオ、写真、スライド、絵、図表などを活用している。

b) 1 時限 90 分は長すぎるので、5 セッションに分けている。各セッション間には 3～5 分のブレイクを入れている。この際、目の疲れをとるためにスクリーンを off 状態にしている。

c) 第 2 セッション後のブレイクに、出席カードを配り、学生の参加意識を高めるために講義などについてのコメントの記入を義務づける。コメントの中から適当なを選び、第 4 セッションのはじめに答えている。

- d) 筆者のホームページの「東南アジア掲示板」に記載の学生との問答を紹介解説している。
- e) 講義に関連する筆者作編のホームページをいくつか部分的に紹介している。学生はこれによりさらに追跡学習をおこなうようになり、インターネットが活用できるようになっている。
- f) 講義終了後、講義のレジメをホームページに掲載し、事後確認の便をはかっている。
- g) 毎日、希望の学生に外国接近学関係とコンピュータ関係の「通信」を2通配信している。これにより、毎日間接的ながらも接触をはかっている。

### 2-3 昨年（第1回）の問題点

- a) 昨年度からスクリーン授業を始めたが、準備不足と知識不足、機器の不備で、機器が思わぬ時にダウンすることがたびたびあった。そのため今年度は、予備の教材とトピックを用意しておくことにした。
- c) 途中でブレイクをはさまなかったため、教える方も教わる方も息を抜くことができなかった。
- d) 学生諸君にコメントを求めなかったため、一方的な講義に終始していた。
- e) 講義内容のジャンル分けがしてなかったため、学生は講義に使われたオンラインのページを探すのに、時間を浪費していた。
- f) 動画や java などの最新ツールをホームページに入れ込んだ結果、旧式のシステムではフリーズすることがあった。ツールは最新のものは避けた方が賢明である。
- g) 大講堂での準備に最低 30 分は必要なのに、前の時間がほかの授業でつまっていて、準備時間が足りなかった。今年は、午後第 1 時限目にくむことで、昼休みを活用している。

### 2-4 実践結果

- a) 「反復学習による習熟度の向上」という目標は、予想以上に達成されている。

- b) ブレイクの効果を双方が享受している。ブレイクの中に次のセッションの準備ができるし、学生諸君は、集中力の回復をはかることができる。
- c) コメント方式も有効である。講義方法に関したのものもあり、大いに活用フィードバックできる。たとえば、「教室が暗すぎてノートが取れない」、「スクリーンの字が小さすぎる」、「先生の現地体験談を話して」、「先生の撮った写真を見せて」、「動画をおおくして」など。
- d) 欠席者、特に教育実習、就職活動中の 4 年生には、講義内容を事後学習できるので、本方式の恩恵を大いに享受している。
- e) オンライン上で事後学習できるので、はしより授業が可能になった。
- f) 関連の事柄に関し、ホームページのサイトを紹介することにより、学生は事後学習をするようになった。このことは、講義終了後、筆者のホームページのカウンターの数値が格段にあがることでわかる。
- g) 講義の内容に関して、イーメールやホームページの伝言板で相互交流の機会が大いに増した。講義終了後も、話しかけてくる学生が多くなった。
- h) 講義中に画面の切り替えが瞬時にでき、地図や写真など挿入することで、講義の立体化がはかれるようになった。既習事項の復習も瞬時にできるようになった。
- i) 「掲示板」による即答方式は、双方向性を大いに高めている。
- j) インドネシアのスハルト辞任、インド・パキスタンの核実験では、インターネット素材を活用し、即時性、臨場感を大いに高めた。環境ホルモン、従軍慰安婦、教科書問題などの現代的問題でも、インターネットを活用した。
- k) 筆者の「〇〇語、ちょっぴり」シリーズなどで外国語の初歩を音声学習できるために、学生諸君は現地研修に出かける意欲をさらにかき立てられるようになった。

l) 現地研修に出かける者が、昨年よりはるかに多くなった。

m) 現地研修後にホームページを立ち上げることで、受信者側から送信者側に回ることができるようになった。

## 2-5 課題と展望

a) 教材のクオリティとクオンティティを向上させる。「桑原政則のページ」の掲載タイトル（現在延べ 120 本）を 300 本にする。

b) オーサリングツールの使用による教材制作の合理化をはかる。

c) バイリンガル掲示板により海外との交流をさらに増進する。

d) 時間・空間・距離の制約にとらわれないマルチメディアの特性を生かし、現在、タイのチェンマイ大学、ランシット大学の日本語学科の学生とのオンライン交流を進めており、いずれは東南アジア内での相互交流もはかりたい。